第 21 回企画展

カスリーン台風から60年

―個人記録に見る大水害―

利根川決壊口付近の様子（昭和 22 年 9 月 20 日ＧＨＱ撮影）

※利根川上流河川事務所提供

十一日、朝は実に晴しい天気だ。秋晴れの、おそる〻この、よき日が災害の日であつた。立ちやかさで水害の日の朝が来ていたのである。

故三野 亮氏

「水害日記（カスリン台風）」より

平成19年9月10日（月）～11月11日（日）

久喜市公文書館

開催にあたって

久喜市公文書館では、この度、第21回企画展としまして、「カスリーン台風から60年―個人記録に見る大水害―」を開催いたします。昭和22年（1947年）9月16日に、現在の大利根町付近で利根川の堤防が決壊し、濁水が北埼玉をのみこみつつ、久喜市域にも襲いかかり、大きな被害を出しました。今年は、この水害から60年になります。水害を体験された方、また、市内南一丁目付近の電柱には、この時来た水の高さを赤いラインで示してありますことから、ご存知の方もいらっしゃると思います。

この水害の際、住民の皆様の中に、水害の状況を克明に記録した方がいました。そうした資料には、事務的な報告書には記されないような様々な事柄が記録者の視線で記録されており、水害時の状況を私たちに伝えてくれています。この企画展では、住民の方が記録した二つの資料を中心にカスリーン台風による市内の水害の状況についてご紹介します。

災害は忘れた頃にやってくるといいます。久喜市では、平成17年に洪水避難地図（洪水ハザードマップ）を作成しております。今一度、内容をご確認いただき、いざという時に備えていただければと思います。

なお、今回の展示を開催するにあたり、貴重な資料を提供していただきました関係者の方々に心からお礼申し上げます。

平成１９年９月

久喜市長　田　中　暄　二

【協力者】

榎本善之助、武井　尚、針谷重威、気象庁、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、埼玉県立文書館、埼玉県立久喜図書館

【主な参考文献】

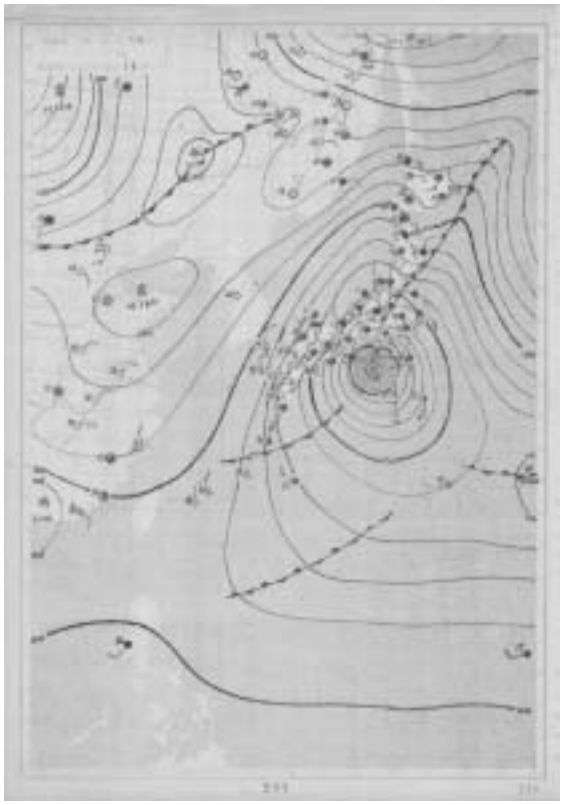
・『久喜市史　自然編』（1990、久喜市）
・『久喜市史　通史編下巻』（1992、久喜市）
・『埼玉縣水害誌』（1950、埼玉県）
・『新編埼玉県史　通史編７』（1991、埼玉県）
・『鷲宮町史　通史下巻』（1987、鷲宮町）
・『吉川市史調査報告書第三集―カスリーン台風と吉川―』（2003、吉川市教育委員会）
・『幸手市史　通史編Ⅱ』（2003、幸手市教育委員会）
・「アメリカから見たカスリーン台風」（2002、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所）　ほか

●カスリーン台風とは

昭和 22 年 9 月８日、マリアナ諸島東方海上で発生した熱帯低気圧は、後に台風に変化しました。アメリカを中心とした連合国軍の占領下にあったこの時代、台風にはアルファベットの順番で女性の名前がつけられていました。この年の 11 番目の台風は K ではじまる[KATHLEEN]。これがカスリーン台風です。

台風は紀伊半島の南海上を北上し、9 月 15 日に北緯 32 度を超えてから北東に進路を変え、同日夜、房総半島南端をかすめて 16 日には三陸沖へ進みました。強風による被害は少なかったのですが、進行が遅く、それまで停滞していた前線を刺激し、9 月 13 日から 15 日までの 3 日間に、前橋で 393 ミリ、秩父で 611 ミリなど特に利根川、荒川上流部で観測開始以来の記録的な雨をもたらしました。

秩父や利根川上流の群馬県では、戦時中に行われた山林の大量伐採により、保水能力が低下していたところに、大雨は利根川、荒川に一挙に流れ込みました。また、戦争中、治水対策が進んでいなかったことも被害を大きくさせました。



昭和 22 年 (1947 年) 9 月 15 日
午前 3 時の天気図
(気象庁提供)

栗橋付近では、利根川に合流する渡良瀬川も水位が上昇し続け、合流点付近で水位が異常に上昇し、栗橋付近で計画高水位を 1.62 メートル上回り、最高水位 9.17 メートルに達しました。そして、9 月 16 日午前 0 時 30 分、ついに、北埼玉郡東村新川通（現在の大利根町の一部）地先で、一大音響とともに延長 340 メートルにわたり堤防が決壊しました。

利根川の洪水は、荒川の洪水と大山村・篠津村（現在の白岡町の各一部）付近で合流し、19 日未明には東京都に及び、足立区、葛飾区、江戸川区が浸水しました。

避難生活 (昭和 22 年 9 月 20 日 GHQ 撮影) 利根川上流河川事務所提供

刻々増水する久喜駅前の避難者(『埼玉県水害誌』より)

カスリーン台風による被害は、県内では北葛飾郡と北埼玉郡で特に顕著でしたが、久喜市域でも、死者１名、負傷

者 22 名を出したほか、浸水家屋 2,815 戸、全半壊 80 戸という大きな被害を受けました。

この他、カスリーン台風によって、群馬県、栃木県をはじめ、東北地方の岩手県などでも大きな被害を受け、全国で死者 1,077 名、行方不明者 853 名にのぼりました。

筏（いかだ）を漕（こ）ぐ青年たち（利根川上流河川事務所提供）

●久喜市域の被害

9月 16 日早朝、鷲宮へ浸入した濁流は、昼近くになって北方より久喜市域めがけて津波のように押し寄せてきました。濁流は葛西用水に沿うもの、青毛堀に沿って流れるもの、中落堀川に沿って流れ下るもの、新川（にっかわ）用水左岸仏供田（ぶくでん）落（おと）し沿いに流下するものの 4 本の流れになって浸入し、午後２時ごろまでに太田村の大部分を水没させ、４時ごろまでに久喜町の大半と江面村の下早見、太田袋方面をのみこみ、やがて４本の流れは合流して古利根川沿いに南下していきました。

久喜市域における被害は次のとおりです。※現在の久喜市は、昭和 29 年に下表の一町三村が合併して新生「久喜町」となりました。

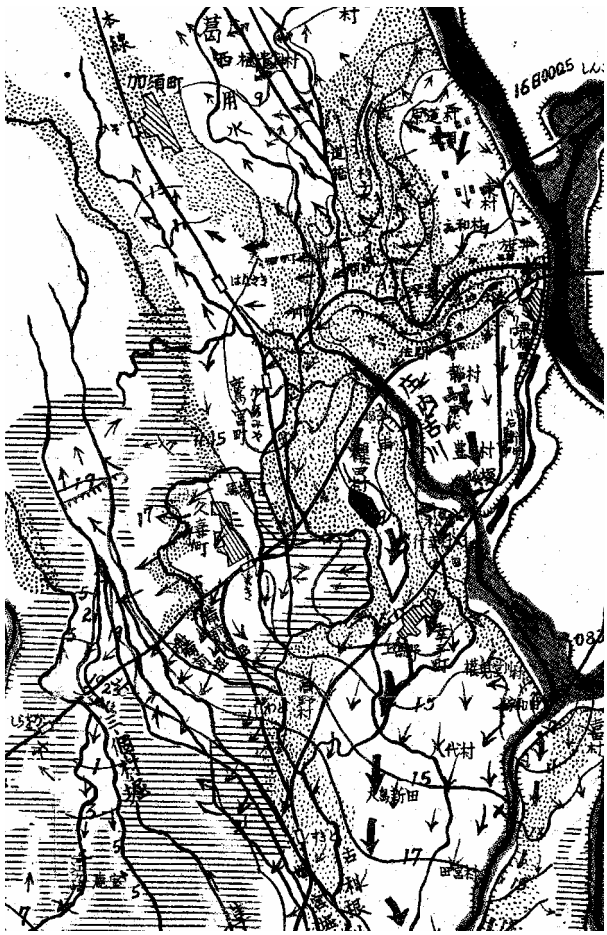
		久喜町		太田村		清久村		江面村		計	
流失家屋		—		—		—		—		—	
全壊		1		—		—		—		1	
半壊		—		74		—		5		79	
床上浸水		1,165		547		26		300		2,038	
床下浸水		362		127		68		220		777	
罹災人口		8,392		3,706		478		2,860		15,436	
死亡		—		—		—		1		1	
負傷		—		17		—		5		22	
行方不明		—		—		—		—		—	
農作物被害		水稲	甘藷（かんしょ）	水稲	甘藷	水稲	甘藷	水稲	甘藷	水稲	甘藷
作付面積（反）		1,053	51	2,010	163	2,909	157	4,431	227	10,403	598
被害程度別面積（反）	収穫皆無	500	45	1,304	130	80	—	1,062	100	2,946	275
	7 割以上減収	399	—	706	—	120	—	1,433	—	2,658	—
	7 割～5 割減収	154	—	—	—	60	—	608	—	822	—
	5 割～3 割減収	—	—	—	—	150	24	419	—	569	24
	3 割未満減収	—	—	—	—	190	56	400	35	590	91
	計	1,053	45	2,010	130	600	80	3,922	135	7,585	390

※『埼玉縣水害誌』（1950、埼玉県）による

※反=約 10 アール　※甘藷=さつまいも

■久喜町の床上浸水のうち、最高は「床上五尺」（151.5ｃｍ）とある。

■参考：昭和 25 年（1950 年）の久喜市域（上の表の１町 3 村）の人口は 21,069 人。※『埼玉県市町村誌　第 17 巻』（1979、埼玉県教育委員会）による。



利根川決壊点 (右上) からの洪水の流れ。矢印は洪水の流れを、矢印の太さは流れの強さを示す。(『埼玉縣水害誌』昭和二十二年九月水害調査報告附圖一「利根川及び荒川の洪水の進行」の一部を転載)

屋根に避難した大勢の人々（利根川上流河川事務所提供)

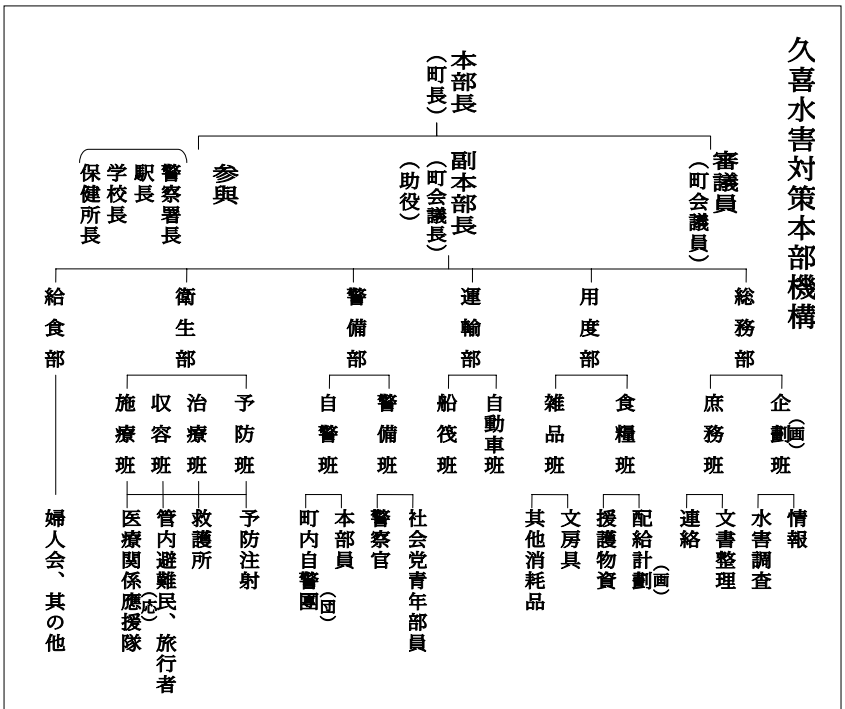
■上記のほかに、道路の決壊 8 か所、橋梁の破損 4 か所があり、ともに米軍工兵隊の援助等により応急修理を行った。(久喜市史通史編による)

特に太田村・久喜町で被害が多かったことがわかります。江面村がこれにつぎ清久村では比較的軽い被害でした。これは、市域のほぼ中央を北西から南東に連なる新川用水沿いの自然堤防※により市域の西側は、ほぼ浸水の被害をのがれたことによります。市域の東部は、一部の台地部分を除いて大半は水没してしまいました。

また、故武井友幸氏の「洪水記」には、新川で逆流がおこって、「近くの土手を越えて流れ落ちる水の音が滝の音のようにごうごうと聞えてくる」と記録されています。また、備前堀川、備前前堀川でも逆流がみられました。

秋の収穫時期を前に、農作物への被害も甚大でした。太田村では水稲の作付面積 2,010 反中 1,304 反が収穫皆無、残りが 7 割以上の減収。久喜町でも、作付面積の半数強が収穫皆無で、残りは 5 割以上の減収という大打撃を受けました。しかし、この状況下にあっても、供出の割り当ては厳しく、収穫があっても、すべて供出して還元配分を受けなければならなかった農家も多く出ました。

※自然堤防：河川が氾濫した際に堆積した土砂が積み重なって、自然にできた堤防状の微高地。(参考：藤岡謙二郎他編『日本歴史地理用語辞典』(1981 年、柏書房）他)



埼玉県『埼玉縣水害誌』(1950、埼玉県) より

●旧久喜町役場・ 埼玉県災害対策本部久喜出張所の対応

久喜町役場では、９月 16 日午前 1 時ごろ警察から、利根川堤防が東村地区で決壊したとの急報を受け、直ちに全町に防水と避難の準備をするようにと伝達をしました。しかし、午前 11 半頃鷲宮方面から浸入してきた濁流は、みるみる町の大半を泥海の底に沈めてしまいました。町では全町浸水と同時に避難所を設置し、町内の避難者とともに旅行者を収容し、食料、飲料水、当座の衣料品などを支給しました。当時町では、舟艇の用意がなかったため、町の青年部員は筏(いかだ)を作り、屋根や樹上に避難し助けを求めていた人々を次々と収容したり、罹災者の家財道具などの搬出に不眠不休の活動を続けました。9 月 25 日になると県の災害対策本部久喜出張所が開設され、以後両者が協力して救援活動を行いました。この出張所は、10 月 20 日まで存続され、主に食料及び物資の配給を行いました。

■埼玉県災害対策本部久喜出張所の記録（久喜市域に関する部分を抜粋）

※久喜出張所は久喜町・太田村・江面村・清久村（現在の久喜市の各一部）、鷲宮町（現在の鷲宮町の一部）、高野村（現在の杉戸町の一部）、須賀村（現在の宮代町の一部）、篠津村・日勝村（現在の白岡町の各一部）を所管。

※漢字・送り仮名等は現代のものに改め、また、表現は一部を除いて変更しています。

9 月 20 日	9 月 20 日の浸水状況等 久喜町浸水家屋 800 戸内外、最水深は 4 尺 5 寸程度（約 136cm）。太田村浸水家屋 700 戸内外、最水深は 5 尺程度（約 152cm）。避難民久喜町 500 名、太田村 175 名、いずれも救護対策委員会により、救護の万全が期せられている。
9 月 21 日	鷲宮町は全町浸水。太田村は全村の四分の一浸水。いずれも緊急救済の方法を講じつつあり。コッペパン配給（久喜町 2,000、鷲宮町 3,500、太田村 2,000、江面村 2,000、日勝村 500）。
9 月 22 日	コッペパン 10,000 食、幸手署渡し。薪(たきぎ)1860把(わ)（久喜町 522 把、太田村 300 把、鷲宮町 500 把。残りは幸手町へ）。「久喜より幸手への連絡は、船車ともに不能、よって本日奉仕員二十数名にて、手押荷車を以て幸手町附近まで行き、さらに船をもってコッペパンの運搬をなす。幸手町への初の連絡である。」。増員のため 8 名派遣され、所員計 15 名となる。
9 月 24 日	「久喜幸手県道に渡船を計画したから、至急優秀な船頭を派遣せられたい。猶(なお)船は進駐軍貸与の鉄舟八隻と、警視庁より貸与の一隻計九隻を充当する意向である。」
9 月 25 日	江面地区県道の備前堀橋梁(きょうりょう)は、白岡への距離を四分の一に短縮するため、この補強を促進してほしい。（県への依頼）
9 月 26 日	久喜・太田・江面他へ野菜、薪を配給。久喜・太田・江面・清久他へ粉乳、テンカ糖（添加糖）の配給。
9 月 29 日	太田村へ甘藷(かんしょ)30 俵、太田村他へ衛生防疫用薬その他を配給
10 月 1 日	第 1 次配給物資割当並びに今後の防疫対策に関し管内七箇町村長会議を開催。救援物資を次のとおり輸送。三箇村（現在の菖蒲町の一部）より太田村へ藁 180(そだ) 束、押麦四俵、白米一俵、薪 100 束。大山村（現在の白岡町、菖蒲町の各一部）より太田村へ藁 150 束、粗朶(そだ)薪 30 束。
10 月 2 日	久喜町役場において、管下 13 箇町村の防疫打合会を実施。明日から巡回医療班が管下の予防注射並びに診察を予定。自動車を借用し、野菜不足の太田村へかぼちゃ 728 貫、芋がら 20 貫、ねぎ 43 貫、ほか 37 貫を輸送。

10月3日	久喜町外6箇町村へ釜、蒲団(ふとん)、地下足袋(じかたび)、マッチ、ろうそく、石けん、バケツ、梅ぼし等の配給。太田村・鷲宮町へは薪・藁を各トラック1台分送る。久喜出張所は、10月4日から新町二丁目新二会館に移転の予定。
10月5日	春岡村農業会（春岡村は現在のさいたま市の一部）より、甘藷二車 82 俵入荷。久喜町一般に無償配布の予定。
10月7日	太田、鷲宮を除く各町村は、漸次(ぜんじ)平常に復しつつあることから、出張所の人員を縮小。厚生技官が久喜、太田村の衛生状況視察。
10月9日	浦和市よりの見舞品、コンロ、鍋、薪、佃煮(つくだに)、菖蒲町及び平野村（現在の蓮田市の一部）よりの見舞品の衣料を管内町村に分配。本部よりコンロ450個受入。
10月10日	この日の降雨について、鷲宮町・太田村の状況を調査。別に異常を認めず。水害減水後の防疫措置強化のため、臨時防疫員講習会を久喜町役場において開催。受講者35名。
10月18日	鷲宮町、江面村へ蒲団、毛布、地下足袋等218点、清久村、太田村、日勝村、大山村へ地下足袋250足配給。地方事務所長の指示により、久喜出張所は20日中に閉鎖し、幸手出張所と合流の上、21日より事務開始の予定。

※『埼玉縣水害誌』（1950、埼玉県）より作成

水害時の久喜駅の様子　利根川上流河川事務所提供

保健所、厚生省、進駐軍などの援助により、国立病院、日赤病院などから医療チームが派遣されて防疫活動に従事しました。このため、伝染病の発生数は、水害直前の発生数を下回る状態で推移することができました。

濁水は水害の起こった翌日から少しずつ減水し始め、集落や道路では一週間ぐらいでほぼ水はひきました。水田の大部分では一週間ぐらいかかりましたが、長いところでは久喜町で10～20日、野久喜、古久喜などでは一か月近くも冠水していたところもありました。

水の高さが記された電柱（市内南1丁目）
平成19年8月撮影

●久喜市域におけるカスリーン台風の記録

久喜市域において、大正時代以降、最大の災害といえるこの水害に関して、対策や経過、具体的な被害状況などは、当時の行政文書（旧町村文書）が残されていないことから、埼玉県など他の機関が作成した資料から当時の状況をうかがうしかありません。

しかし、これから紹介する二つの資料は、住民の方が自ら水害の様子を

故三野 亮「昭和22年9月16日　水害日記（カスリン台風）」

つぶさに記録した資料で、水害発生の知らせを聞いた人々の心構え、心理状態、そして、具体的にどう行動したかなど、水害時の有り様を具体的に伝えてくれます。

■故三野（さんの） 亮氏の記録

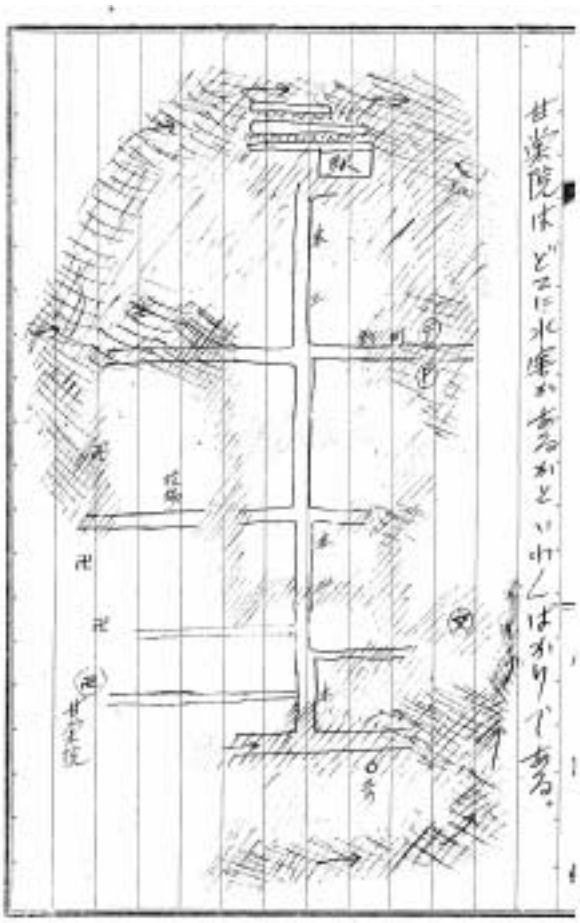
「昭和 22 年 9 月 16 日　水害日記（カスリン台風）」（三野亮家№１）

故三野亮氏宅はカスリーン台風襲来の際、現在の本町５丁目１付近に住まいがありました。この資料は平成 6 年に、三野亮氏から当館へ寄贈されました。

Ｂ５サイズの縦罫紙（廣島（ひろしま）県のもの）21 枚表裏に、昭和 22 年 9 月 13 日（「前三日の記録」）から 27 日まで記録され、特に、自宅周辺における、水が来る前の様子、水が来たときの様子、水が引いていく様子を定点的に記録し、その時々の心境が克明に記録されています。また、久喜町中心部の浸水区域を描いた略図が挿入され、非常に概略的ではありますが、久喜町中心部の浸水状況を伝える貴重なものといえます。その他、時折、水害の様子を詩的に記述し、末尾には新聞記事の切り抜きも添付されています。構成や筆跡から、水害後に記録されたものと推定されます。

久喜町中心市街での水害の様子や避難の様子などを、故三野氏の記録から追ってみます。故三野氏の記録、特に、水害前の様子から水が来たときまでを抜粋して紹介します。

なお、漢字はそのまま。仮名遣い、送り仮名は現在の表記に改めてあります。



9 月 16 日の記録の一部

※斜線の部分は浸水したところ、矢印は水の流れを示している。

十六日

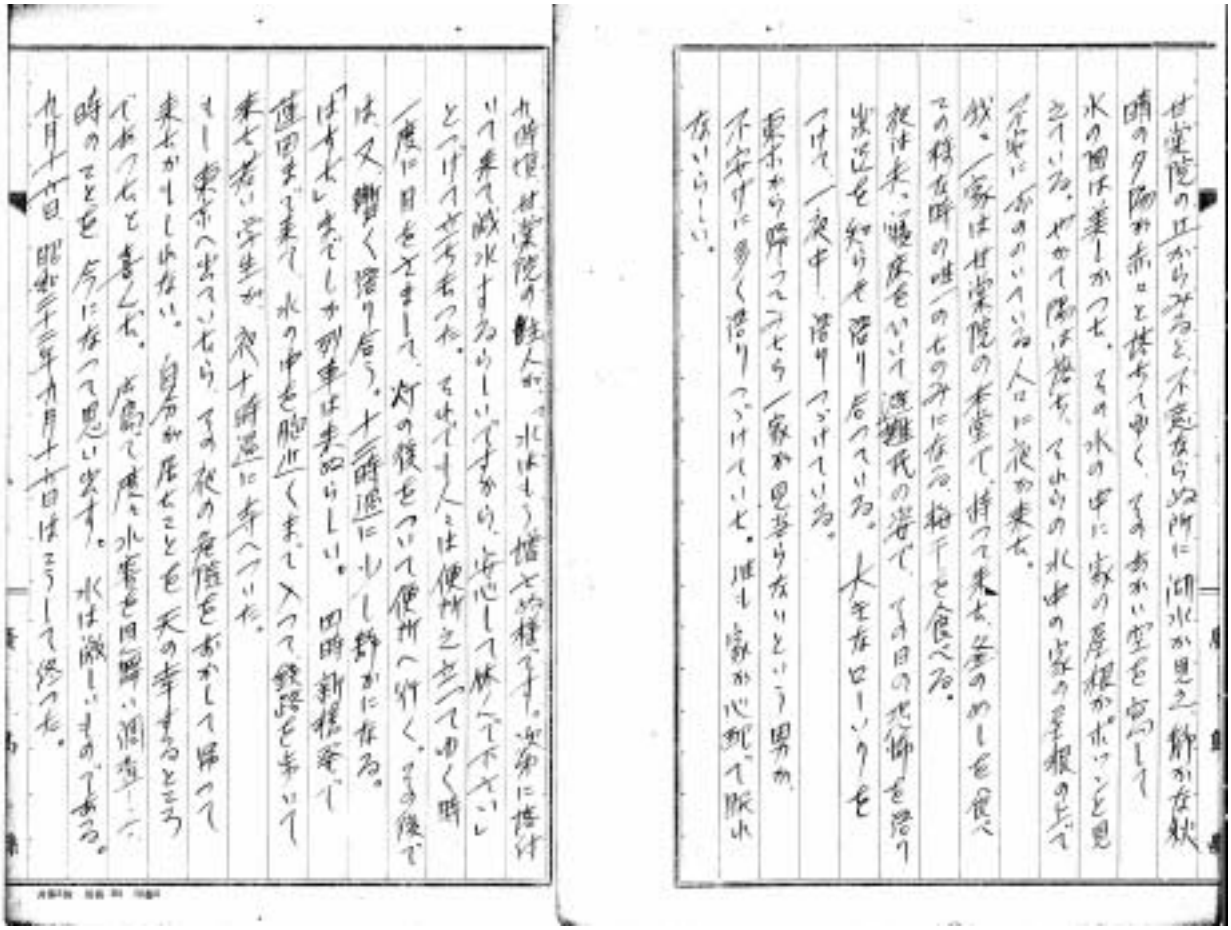
「朝は素晴らしい天気だ。秋晴れのさわやかさである。このよき日が災害の日であった。おそるべき水害の日の朝が来ていたのである。」

「いつもの六時三十分の新橋行の列車に乗るため、六時十五分の天気予報をきく。ニュースの終りに、昨夜来の雨のため、久喜間おりかえし運轉（うんてん）中であることを知る。」

「駅では、六時五十分久喜発上野行が出ると云（い）うことだ。列車もホームに入っていて、空（す）いている。余程行くつもりだったが、少し様子を見ていると、大部分は帰ってしまう。一人の婦人が駅長に会って色々話をきいていた。いつもインテリ的な婦人と思ってみていた婦人だったので、その人の行動に従うつもりでみていると、婦人は、帰りには、こっちまで水が来るらしいというので帰りついた。駅員は大利根が切れて栗橋は全滅し、水はすでに鷲ノ宮まで来ている。晝（ひる）頃には久

喜にも水が入ってくる様子だから、帰りは大宮折返しになるだろう。こういう予想である。もし水害にでもなれば家が大変だからと思って帰る。」

その前、駅へ向かう途中、警察のサイレンや半鐘（はんしょう）の鳴る音を三野氏は聞いていた。
自宅へ帰った三野氏は、物を吊り下げるため、鴨居（かもい）に釘を打ち付けるなど水害への備えをはじめる。



9 月 16 日の記録の一部

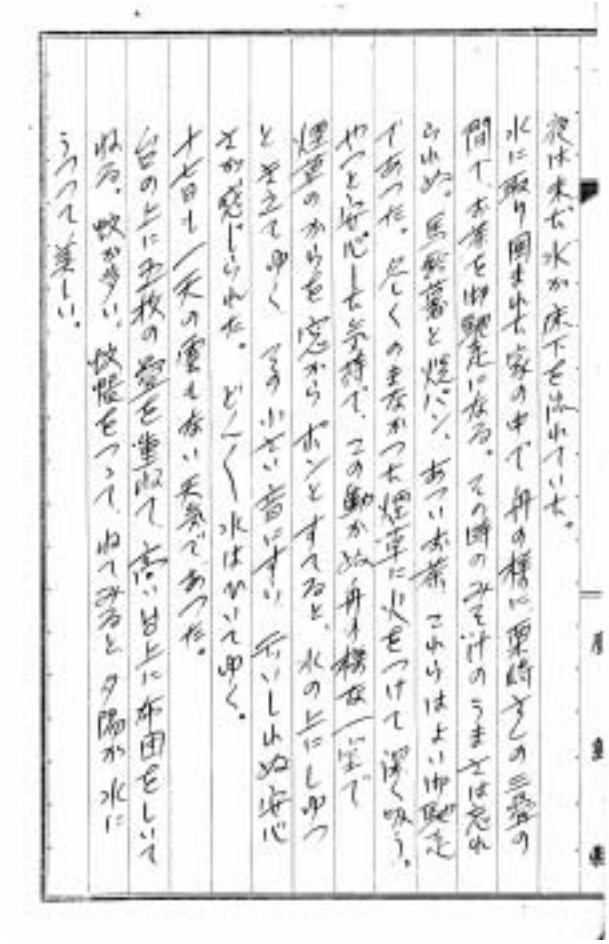
「どこの家も万一の用意に便所をくみ出して畑にまいている。うちでも一ぱいの便所をくみ出そうと茂木さんから、おけを借りて、一パイくんで約三十米（メートル）離れた畑に持ってゆく。」

隣家の栗崎宅で着々と進められていく準備の様子を見ながら、三野宅でも準備が進む。

「栗崎さんでは、すでに、おし入れの用意をととのえ、夜具を包んでいた。出来るだけの用意をしようと思って、自分の家も、おし入れに、つめるだけの夜具蒲団（ふとん）をつめていると、妻は水をみてからでないと、本気に仕事が出来ないと云っている。外の煉炭（れんたん）と炭の入れてある箱とコーライトのくづを入れた大箱をそのまま畳（たたみ）をあげた床にのせて、一段高い台を作る。この台の上に物をのせようという計画ではなく、むしろ地上のものを床の上にのせて置くという意味から夢（む）やみに、置いた。すべての物を上にのせて水の来る方向をみていたが、やはり晴れた遠山があり、せみがなき、小鳥が飛んでいるだけであった。」

「十一時半頃、晝食の水とんを作って食べ始める。表の畳屋さんが、はだしで来て、「こっちの方向に水が見えたら、すぐ来ますから、用意しないと大変ですよ。明治四十二年（注：明治 43 年）の水害も、この方向でしたから」と云う。

「丁度西の方向に低くひろがる、黄色く色づいた田甫（注：田圃）をこうして、遠く、晴れた空に、浅間山が近くせまってみえる。最近にない美しい眺めだった。」



9 月 17 日の記録の一部

「茂木さんの若主人が、畠に出て来た。「水だ。水がみえる」と云って、あわてて家に飛んでゆく。遠く、白く光る水がみえて来た。子供達は水を見に畑の小高い所へ出てゆく。どの家の人も畑で、いもやねぎや作物を取って、あわてて家へ入りこむ。」

この辺りでは、11 時半過ぎに水が来たことがわかる。

「愈々台の上に畳を包んで、米びつを始め出来るかぎりのものを積み上げる。」

「水はみるみるうちに近くの水田をうめて流れ始める。丘をのこして、水はたちまち南側の水路から表の通りへぬけて、まわり始めた。
井戸水をくめるだけくんで、たらいやバケツに入れる。栗崎さんでは、風呂おけに一パイ水をはっている。にごった水であるが、それでも仕方がない。二，三バイくみとって、子供らと妻をひなんさせる所を働き乍ら打合せる。甘棠院がよかろうということになる。もう水は表の路を流れ始めた。次第に前の畑をうづめて庭にも水がたまってくる。」

「「子供達をひなんさせた方がいいですよ」という聲に、妻と子供らをおいやる様にして、甘棠院へ行かせる。その間、夢中で片つけ又考え、物の下置になってしまった炭箱から、炭をとってカゴに入れ、煉炭を全部とり出す。床に次第に水がしみ出てくる。裸で活躍である。」

「大切な物を包んで、一度甘棠院まで運び、つづいて夜の必要な毛布に子供の寝具を入れて持ってゆく。
二、三度運んで、やがて水びたしの畳が三枚、ぶかぶかしている上に重しに物をのせて、この上はどこまで水がくるか仕方がないとあきらめる。もう一面の水である。水は増すばかりだ。」

屋根に避難（鷲宮町内）

鷲宮町　針谷重威氏所蔵

「夕方には門口はふんどしをぬらすまでの高さであった。上宮本（注：現在の久喜眼科）さんから吉岡菓子屋（注：現在の角のよしおか）に向かって水勢がはげしく、足をすくわれるばかりである。夕方水をおかして家に入ってみる。すっかり水浸しの床の中で本箱をのせた三枚の畳が浮くのではないかとそれが心配であった。一日中活動しつづけ、暗くなった時、甘棠院へ帰る。栗崎さんと鈴木さんと三軒が一応鐘堂に上がっていったが」「夕方全員五十一名が假の宿をこの寺ですることになる。」

「我々一家は甘棠院の本堂で、持って来た釜のめしを食べ、この様な時の唯一のたのみになる梅干を食べる。夜は夫々寝床をひいて避難民の姿で、その日の恐怖を語り、状況を知らせ語り合っている。大きなローソクをつけて、一夜中、語りつづけている。」
「九時頃、甘棠院の主人が「水はもう増さぬ様です。次第に落付いて来て減水するらしいですから、安心して休んで下さい」とつげて立ち去った。

「昭和二十二年九月十六日はこうして終った。」

16 日は甘棠院本堂に 51 名が避難していたことが分かる。「甘棠院は、どこに水害があるかといわんばかりである。」と記されていることから、甘棠院は水害を受けなかったと思われる。

●明治 43 年の洪水

2 つの台風と低気圧の停滞による大風雨で県下に大水害をもたらしました。明治 43 年 8 月 11 日利根川・荒川が決壊、市域はもちろん北埼玉・南埼玉・北葛飾・北足立の大部分を浸水し、県下の 24%が浸水という甚大な被害でした。市域でも浸水家屋 2,133 戸、所要救助人数は 4,048 人で、11 日夜から 15 日夜までは炊き出しをして、一人一日 6 個の握飯を給しました。

明治 43 年の洪水時の久喜停車場（久喜駅）の様子
（榎本善之助家提供）

コラム

久喜中学校の建築用材流される

戦後の教育改革により6・3制が導入され、久喜市域では昭和 22 年 4 月に、久喜町立久喜中学校、江面村立江面中学校、太田村立太田中学校、清久村立清久中学校が新制中学校として開校しました。しかし、当初、各校とも独立校舎をもたず、各小学校を間借りしたり、公民館や倉庫、物置を教室にするなど劣悪な条件下で発足しました。

久喜中学校では、校舎建築のため、近隣各地の不要建物を探し、古河駅近くにあった軍需工場二棟を買収し、解体して建設地（現在、中学校のあるところ）へ運びました。しかし、カスリーン台風による水害により、建築材料の大部分が流失し、東北本線を越えて市域の東部にまで流れて行ったものもありました。建設委員や青年団、教師や生徒、町の職員などが資材の回収に廻りましたが、すべて回収することはできなかったといいます。

翌 23 年 3 月、木造平屋二棟が落成。当時、新生中学が独立した校地、教室を持つということはまれな事で、近隣市町村はもとより、県内でも先端を行く教育行政として注目をあびていたといいます。（参考：『久喜市立久喜中学校創立四十周年記念誌』）

昭和 23 年頃の久喜中学校（当館蔵 資料№1815）

■故武井友幸氏「洪水記」

北青柳の故武井友幸氏は生前、日記をつけていましたが、カスリーン台風による水害の様子についても、詳細な内容を B４版のノートに記録していました。舟を出して、知人の安否を確認し、人を救助し、武井氏が関係していた杉戸町の養鯉場の様子を確認するなど、久喜市域にとどまらず、周辺町村の水害の様子も記録しています。行き場を失った動物や虫などの様子もつぶさに観察しているのは興味深いといえます。さらに、当時としては珍しく、各地の様子を写真撮影している点が記録の価値をより一層高いものにしているといえます。

ここでは、水害発生の昭和 22 年 9 月 16 日から 20 日までの内容を抜粋して紹介します。仮名遣い、送り仮名は現在の表記に改めてあります。

９月１６日

「朝７時過ぎ、久喜警察署のサイレンが、けたたましく非常警報を秋晴れのこの辺一帯に鳴り響かせた。空襲警報と全く同じ合図である。私も非常警報であることは分ったが、洪水を知らせる警報であるとは想像もしなかった。そこで隣へ問い合わせたところ、利根川の堤防が栗橋の上流で決潰して、水は鷲宮町へと入りつつあるということであった。愕然（がくぜん）としたが、洪水がここまで襲うかどうかは見当もつかなかった。

しかし、明治 43 年の洪水の前例から考えると、高台にあるわが家が浸水することはまずあるまいと思われたので、洪水の準備はその模様を見てからすることにした。」

その後、武井氏は杉戸町にあった養鯉場（武井氏はその設置に関係していた）へ自転車で向かう。現地で、管理人と対策を講じていた。

「（午後）2 時を過ぎて」「水は足首を浸すまでに至ったので身の危険を感じ、遂に放棄することになった。」

「これより 30 分前には、遥か北方は白い湖と化していた。」

「養鯉場を放棄した頃になると、洪水の先端が養鯉場の北方にある幅３，４間（注：１間は約 1.8m）の川の堤防の向こう側を湖水と化して、津波もかくやと思われるすさまじい勢いで押し寄せてきていた。堤防を越えた水は無数の滝をかけたが如く、ごうごうと物凄い音を立てて流れ落ち、不安を一層かき立てる。」

「私の目にはっきり残るのは、巨大な湖と化した洪水の先鋒（せんぽう）の光景であった。それは何ともいいようのない異様で不気味な眺めであった。」

杉戸から北青柳の自宅へ向かう途中、古利根川に架かる和戸橋の付近は「３，

電 報　鷲宮町　針谷重威氏所蔵

安否を心配する久喜の親類から届いた電報。水害発生から一週間後の「昭和 22 年 9 月 23 日」の日付印が押されている。

４尺（注：1 尺は約 30.3 ㎝）の水深となり、渦巻いて流れる水勢は自転車も没する程で、乗ることはおろか押して進むことも困難であった。」

備前前堀の橋のたもとにある家に自転車を預け、そこからは備前前堀の土手を歩き、自宅へ向かう。

「下早見の方面は川を距(へだ)てて黒褐色の水が渦を巻いて流れていた。箱や家財道具が流れてくるのが見える。土手を通ると土手に這(は)い上がっていたもぐらが逃げ場を失って水中に飛びこみ、泳いでいるのが見えた。何処かで豚の悲鳴が聞える。備前前堀は逆流して上流へ上流へ流れていた。」

９月１７日

「家の周囲の水位は裏が夕刻、前は夜半をもって最高に達し、その後は徐々に引きはじめたが、前の水田は稲の穂先が悉(ことごと)く水に没し広大な湖水と化していた。昨日殆(ほとん)ど水の無かった前の道路は深さが３尺ほどになっていたが、水勢は弱く通行は不能であった。」

午前 10 時、武井氏は預けていた自転車をとりに、舟で和戸へ向い、その後、久喜町の中心地へ舟を進めた。

「下早見の新田や太田袋の辺の民家の水位は床上２、３尺が普通であり床下で済んだ家は殆んど見られなかった。中には軒まで僅(わず)かしか残っていない家もあり、平屋は大抵空家になっていて人の気配はなかった。」

「この辺（注：備前前堀沿い）で思いもかけない光景が見られた。そこは５尺を超える水深なので畑か道路際か分らなかったが、濁流に洗われてびくともせず一本の榛(はん)の木が流れの上に立っていた。舟がそこにさしかかった時、水面から１尺余り出ている枝にねずみと蛇(へび)、それに蛙(かえる)や虫の類までとりついていたのである。舟が近づいても幹の上の方へ逃れようともせず、同じ枝の上をうろうろと動き廻っているだけであった。」

久喜町東部踏切付近（故武井友幸氏撮影）
現在の東 4 丁目付近から旧久喜町を望む（９月 17 日）

「洪水という極限状態に置かれれば、たとえ餌が目の前にあっても食べるどころではなかったのだろう。」

「和戸から久喜までは県道づたいに舟を漕(こ)いだが、道路の上でも３，４尺の深さを示し、下早見の新田の辺ではまだ５尺の所もあった。」

「久喜町へ入ると予想以上の水深で、町はずれのあたりは家の多くが床上浸水をしており二階から舟を眺めている人もいた。」「丸太や流木などを筏(いかだ)に組んで漕いでいる者も見られた。」

９月１８日

この日、武井氏は桜田村（現鷲宮町の一部）の知人の安否確認のため、午前8時に舟で向かった。

「駅（注：久喜駅）の南側に出た後、線路に沿って駅の構内を通過したが、ホームは僅か２,３寸（注：1 寸は約 3.03cm）水の上に出ているだけで、レールの上は２尺余りの深さの濁流が南へ川のように流れていた。」

「駅の北側に出ると激流の中で助けを求める男がいた。見ると線路づたいに来たものの流れの中で動けなくなり、電柱を支えている針金につかまって助けてくれと叫んでいるのであった。物凄(ものすご)い激流のため捨てて置けば命にかかわるので舟を漕ぎ寄せて舟に乗せ、近くの安全な場所に移した。

　それより北に向かい理研工場（注：現在の中央 1 丁目 15 の「久喜スカイハイツ」のところにあった工場。ゴム長靴や雨靴、運動靴その他のゴム製品を製造し、その頃、久喜町有数の工場であった。）の横に出たが、工場は半分以上水中に没し、作っているゴム靴があちこちに浮かんでいた。町の東北を流れる水勢は実に強大でこれを横切るには一方ならぬ苦労をした。」

この後、線路を超えて知人宅へたどり着き、流れに乗って幸手方面へ向かう。

「再び舟に乗って流れを下り、幸手町（注：現在の幸手市の一部）を 10 丁（注：１丁は約 109m）ぐらいに望む所まで行ったが、この辺りから眺める行幸(みゆき)村（注：現在の幸手市の一部）のあたりは一望広大な湖水と化して軒まで浸っている家が多く見られ、これまで見てきた中で最も惨憺(さんたん)たるものであった。水面には漂流物が点々と浮び、家の屋根が流れている光景も見られた。」

「今日通過した 3 里（注：1 里は約 3.9km）の間で浸水を免れていたのは中川崎（現在の幸手市の一部）の辺の十数件と吉羽の高台になっている所だけで、他は例外なく水中にあった。」

水中の久喜町（故武井友幸氏撮影）
洪水 4 日目の旧久喜町の様子　9 月 19 日

「建物でも平屋の家屋では予想もしなかった増水に逃げ場を失い、天井を破って屋根の上に避難した家も見られた。」

「小屋の中に馬や牛が水の上に首だけ出しているのが各所で見られたが、出水 3 日目になるというのに長時間水の中でよく生きていられたと驚くほかなかった。」

「どの家庭でも食料と飲料水には困りきっていた。筏を組んでこれを運搬している光景が至る所で見られた。何といっても今度の水害は、準備が不十分な上、警報が出てから短時間で襲来したので被害を大きくしてしまったことは事実であった。」

９月２０日

「出水 5 日目の現在、家の周囲の水位は大分減じて、前の道などは全く浸水は見られず、備前前堀の手前が１丁余り 5 寸の深さで冠水しているだけであった。」

この日、武井氏はリヤカーを舟に載せて出発した。船が通行できないところは、リヤカーに船を載せて進み、上高野村（現在の幸手市の一部）の知人宅と杉戸町の養鯉場に向かった。

「仏供田（注：久喜市役所、久喜総合文化会館などがある一帯）は３尺程の水深であったが、一部では稲が水面に穂を出していた。」

「久喜町と太田村の境を流れる強大な流れは大分減水して弱まっていたが、それでもまだ相当な勢いで流れていた。」
「いよいよ幸手町へ入る所では、これまでに通過した流れの中で最も強大な水流に遭遇した。これは２日前久喜町の東部を流れていた巨大な流れを上まわる激流であった。」
「深さは７，８尺に及び、２間の竹竿の大部分が水中に没し数尺が水の上に残るという所もあり、舟の操作も困難で少なからぬ危険さえ感じられた。」
「幸手町へ入ると大抵の家が床上２，３尺という程度であった。ここは久喜町とちがい道路が川となって勢いよく流れていた。」

知人宅は二階建てで、家族は二階に避難して無事だったが、建物は大きな被害を受けていた。

「階下は押し寄せた激流に貫かれて柱だけになり、裏までまる見えになっていた。聞けば階下にあった物は全部流されてしまったとのことであった。洪水対策のため当日出勤して家を空けたので、このようになったことは、この上なく気の毒なことであった。心ばかりの見舞品をおくったが心は重かった。」

幸手町駅前（故武井友幸氏撮影）
9 月 19 日

この後、知人を舟に乗せ、杉戸町の養鯉場へ向かった。その帰途、

「太田小学校から久喜駅に出たが、駅の構内は一昨日に比べると大分減水しているものの、舟の通過には差支えがなかった。駅の南側に出た後、まだ相当な勢いで流れている仏供田を横切って家に戻ったのは７時を過ぎていた。」

※全文は『久喜市史 自然編』（1990 年、久喜市）に収録されています。

被災家屋を荒らすドロボウたち

コラム

水害地域の被災家屋に侵入し、家財や食糧などを荒らしまわり、食糧不足に悩む被災住民に対して、非合法に仕入れたヤミ食糧を高値で売るなどの犯罪が各地で発生しました。

右の新聞記事は、悪質な窃盗（せっとう）犯は最高の懲役 10 年、強盗は最高の懲役 15 年を適用し、厳罰（げんばつ）主義をとることを伝えています。

各地で自警団が組織されましたが、故三野亮氏の「水害日記（カスリン台風）」の記述から、旧久喜町においても、自警団が組織されていることがわかります。9 月 22 日の記述の中で、三野氏宅を含む 12 軒で 1 班を形成し、各夜「四時間交代でつめることになるのである」とあります。

The Saitama
埼玉新聞
水害地の悪質犯罪
最高刑で處罰

「埼玉新聞」昭和 22 年 9 月 24 日（提供：埼玉新聞社）

■展示資料一覧

1	天気図（昭和 22 年 9 月 15 日午前 3 時）	22	写真パネル 浸水した街と人々（鷲宮町内）
2	写真パネル 大利根町上空 ※GHQ 撮影 9/16	23	写真パネル 東武線の土手
3	写真パネル 国鉄鉄橋上空から南を見る ※GHQ 撮影 9/16	24	写真パネル 作業する人々（鷲宮町内）
4	写真パネル 大利根町上空から北方を見る ※GHQ 撮影 9/16	25	写真パネル 明治 43 年の水害 久喜駅付近
5	写真パネル 避難生活 ※GHQ 撮影 9/20	26	写真パネル 明治 43 年の水害 橋戸付近
6	写真パネル 利根川決壊口付近 ※GHQ 撮影 9/20	27	写真パネル 洪水の街（鷲宮町内）
7	写真パネル 土手の様子 ※GHQ 撮影 9/20	28	写真パネル 刻々と流れ来る濁流
8	写真パネル 日本赤十字の船 ※GHQ 撮影 9/20	29	写真パネル 江面村太田袋
9	写真パネル 日本赤十字 ※GHQ 撮影 9/20	30	写真パネル 久喜駅
10	「昭和二十二年九月洪水に依る氾濫図」	31	写真パネル 幸手町駅前
11	久喜水害対策本部機構	32	写真パネル 久喜町東部踏切付近
12	写真パネル 水の高さが記された電柱（市内南1丁目）	33	写真パネル 静村付近
13	写真パネル 久喜駅ホーム	34	写真パネル 水中の久喜町
14	写真パネル 久喜駅（南側を望む）	35	『埼玉縣水害誌』（1950、埼玉県）
15	写真パネル 久喜駅	36	台風経路図・雨量分布図（『利根川の 22 年災害を顧みて』）
16	三野 亮「昭和二十二年九月十六日 水害日記（カスリン台風）」	37	埼玉新聞記事（昭和 22 年 9 月 18 日）
17	久喜町市街地浸水略図（三野亮氏）	38	電 報
18	写真パネル 屋根の上に避難(鷲宮町内)	39	一色次郎「下流から下流へ」<磯貝勝太郎編集『ふるさと文学館第 12 巻［埼玉］』p409～446（1997、ぎょうせい）>
19	写真パネル 屋根に避難した人々	40	一色次郎「水のながれ」<一色次郎『枯葉の光る場所』（1972、文和書房））に収録>
20	写真パネル 筏を漕ぐ青年たち	41	洪水ハザードマップ（平成 17 年、久喜市）
21	写真パネル 屋根に避難した大勢の人々		

公文書館案内

■業務案内　公文書館では、公文書等の収集、整理、保存のほか、情報公開制度及び個人情報保護制度の窓口になっております。
また、広報広聴業務、市のホームページ、行政資料コーナー等、市政に関する情報の提供も行っています。

■開館時間　９：００～１７：００

■休 館 日　土曜日・日曜日・国民の休日・年末年始
（企画展の開催期間中は、日曜日も観覧できます）

■発行：平成 19 年 9 月 ■編集：久喜市公文書館 〒346-8501 久喜市下早見 85-1
TEL 0480-23-5010・Eメール koubunsyo@kuki-city.jp